



蚊



川崎ゆきお

風通しのため、ガラス戸は開いている。網戸は閉まっている。虫が入り込むため閉めているのだ。

岸本は庭の金魚に餌をやるため、一日一度は網戸を開ける。庭の手入れなどはしない。洗濯物を干すために庭に出ることもあるが、毎日ではない。金魚の餌やりも冬はしない。金魚も寝ているためだ。

金魚に餌をやるのは夕方が多い。池で魚が釣れるのは夕方が多かったためだろうか。その記憶が岸本にある。それで網戸を開け、庭に出るのだが、そのとき蚊が入るようだ。その蚊はいつもは草の中にでもいるのだろう。庭には雑草が生えている。

「何だろうねえ、あの蚊は」

「蚊がどうかしましたか」

「蚊に刺されるんだよ。部屋の中で」

「じゃ、蚊が入ったのでしょ」

岸田は網戸を開けたときの様子を語る。

「人を追いかけて来ると？」

「そうなんだ。網戸を開けてね、庭に出てね。ちょっと縁側を見たんだよ。すると、蚊が入る様子はない。蚊が何処にいるのかまでは分からないけど、飛べば分かる。網戸が開いたんだから入れるだろ。しかし姿が見えない。開けた瞬間、もう入ったのかもしれないけどね」

「じゃ、網戸が開くまで蚊はじっと狙っていることになりますねえ。他に用事もあるはずでしょ。じっと待機しているものですか」

「だから開けた瞬間には入らなかったと思う。それにわんさと蚊が庭にいるわけじゃない」

「それで」

「どこまで話したかな」

「振り返って縁側を見ているところまでですよ」

「そうそう、それで金魚に餌をやり、戻るんだが、そのとき付いて来たんじゃないかと思うんだよ」

「蚊に尾行されたわけですね」

「尾行というより、刺そうと近付いたのに、私が動いたので、続きをやりに来たんだと思う」

「やはり尾行ですね」

「ところがそうじゃない」

「ほう」

「私が入る前に、先に蚊が部屋にすーと入っていったんだ。これは先回りだろ」

「蚊は一匹ですか」

「そうだ。先に入られたので、何ともならない」

「はい」

「その一匹のために蚊取り線香はもったいない。素早いので殺虫剤では狙えない」

「一匹だけでしょ」

「そいつが夜もいてね。寝る前、耳元でうるさい」

「結局刺されるわけですね」

「しかし、部屋に入ったら出られないはず。次に開くのは金魚の餌やりのとき。それを蚊がじっと待っているとは思えない」

「やはり刺されますか」

「刺される。赤くなり、痒いが、まあ、すぐに治まる。かかなければ」

「じゃ、それでいいじゃないですか」

「まあ、そうなんだが、痒いのは嫌だし、赤いのがしばらく残るのでね」

「まあ、その程度の被害なら」

「ところが、その蚊、血を吸っても、外に出られないなら、どうなるんだろう。栄養を蓄えても、その蚊は閉じこめられているわけだからね」

「まあ、どこか開いているんでしょ。外に出る隙間が」

「それなら、血をやった甲斐もあるが」

「甲斐ですか」

「誰かが得をしないとね」

「そうですねえ」

「ところが、刺している現場でパチリと潰すことがある。そのとき血が」

「時遅しですね」

「これは誰も得をしない」

「はい」

「私の血も無駄になる」

「ははは、まあ、そうですが」

「非常に理不尽なラストシーンだ」

「蚊に刺された程度、虫にかまれた程度の傷って言いますよね」

「まあ、毒がなければいいんだけど」

「蚊は軽そうなので、命も軽そうに見えるんでしょうねえ」

「軽いし数も多い。これが蛇なら、手応えがありすぎる。あとで呪われるのではないかと。それに後始末も大変だ」

「まあ、無駄な殺生はしない方がいいってことでしょ」

「そうだなあ」

「だから、蚊に刺される程度なら、軽いものなので、大目に見れば」

「そう思うんだけど、刺されると腹が立ちますよ」

「はいはい」

了